

六郷の カマクラ

2

月11日から、新しい年の願いごとが書かれた天筆が各家の門口に立てられ、町内のあちこちにトリゴヤ（雪室・雪洞）が作られます。

15日の夜、人々が天筆を持って諏訪宮前のカマクラ畑に集まり、神主さんの祝詞に続き松二才に火が入られ、人々はその火で天筆を焼きます。

天筆焼きの前には竹うちが行われます。願い事が叶うか叶わないか吉凶占いです。

人々はトリゴヤの中で餅や蜜柑を食べながら談笑にふけります。

これが七百年の歴史をもつといわれる六郷のカマクラの基本の形です。

年の初めに、「今年一年がいい年でありますように」と、新しい年の幸せを願う行事が小正月行事であり、六郷のカマクラもこの行事のひとつです。

豊作祈願の農耕予祝行事（どんと焼き、鳥追い行事など）に二階堂氏（後の六郷氏）が左義長（小正月に宮廷で行われる火祭りの儀式）を加え、現在に近い形になったと考えられています。宮廷や鎌倉幕府で正月に書かれた古書（めでたい言葉や願い事）が伝えられて変化したものと考えられており、その正月の古書は左義長の火で焼かれました。

天筆

新しい年の願い事を書いた紙が天筆です。緑、黄、赤、白、青（紫）、5色の紙を三回繰り返し返して張り合わせて作られます。この紙のぼりに個人、家族、町内などの願い事を書き、願い事を神に届けるために焼きます。「古書 天筆和合楽 地福円満楽 天下泰平楽 五穀豊穰楽（願い） あらたまの年の始めに筆とりてよろずの宝かくぞ集むる（年月氏名）」の文字が書かれます。

火の粉を浴びると一年間病気をしない、その火で餅を焼いて食べると一年間風邪をひかない。また、焼かれた天筆が高く上がれば成績も上がり、



文字も上手になると言い伝えられています。

トリゴヤ

雪洞・雪室のことです。横手ではこれをカマクラと言いい、六郷地域ではこれをトリゴヤと呼んでいます。

元来は、害鳥を追い払うために子どもや老人たちが詰めた田畑に作られた小屋のことですが、ここでは正月の雪の中で疑似の農作業を行って新年の豊作を願う農耕予祝行事の一つです。以前は小正月に子どもたちが鳥追いの唄を歌いながら家々をまわり、各家でも子どもたちが来るのを待って餅やお菓子を与えていました。今では雪の鳥追い小屋を作る風習だけが残っています。

松二オ

カマクラ畑の中央に松の芯柱を立て、その周辺に家々で使われた松飾りを集めて積み重ね松の枝で囲んだものが松二オです。同じ大きさの松二オが二基作られます。15日にはその年に歳徳神が鎮座している方向(恵方)の松二オから点火されます。松二オのことをカマクラとも呼んでいました。

竹うち

2月15日、木貝の音が響きわたり町を二分し、南北に分かれた人々が7、8メートルの竹でたたき合う竹うちは、新しい年の吉凶を占う神事です。3回戦って勝敗が決まり、北が勝てば豊作、南が勝てば米価が上がると言われています。

この竹うちは、昔、天筆を焼きに集まった人々の間で偶発的に発生したものです。最初はカマクラの火の粉を浴びるために四方八方から天筆の竹で叩きあっていたとの記録が残っています。現在の作占いの形となったのは、近代になってからと考えられています。

(協力) 六郷カマクラ保存会